

腰痛に対する鍼治療と局所注射の比較 —ランダム化比較試験—

井上 基浩, 中島 美和

臨床鍼灸学講座

【目的】腰痛に対して、疼痛発現局所への鍼治療（以下：鍼）、あるいは局所麻酔薬の注射（以下：局注）を一定期間行い、その効果を比較検討した。

【方法】腰痛患者 23 名を、ランダムに 2 群（鍼：11 名、局注：12 名）に割り付けた。施術部位は患者の自覚的最大痛み部位 2～5 カ所とし、各群、4 回（1 回／週）行った「鍼：雀啄（1Hz）、各所 20 秒、局注：注射針刺入後に薬液の注入（局所麻酔剤とノイロトロピンの混合液）」。

評価には、初回施術前・後、毎回の施術前、施術終了 2・4 週経過後に visual analogue scale（VAS）を用いた。また、QOL 評価として適時 Roland-Morris Disability Questionnaire（RDQ）、Pain Disability Assessment Scale（PDAS）を使用した。

【結果】VAS において、初回直後は両群ともに有意な症状の軽減を示した。しかし、経時的変化パターンに交互作用を認め、各評価時の群間比較において鍼群に有意な改善を認めた。また、RDQ、PDAS においても、鍼群で有意な改善を示した。

【考察・結語】直後効果は鍼、局注ともに認めるが、継続的な治療による累積効果や、その効果の持続期間は鍼の方が期待できることが明確となった。

腕神経叢への電気刺激が正中神経血流に与える影響

中島 美和, 井上 基浩

臨床鍼灸学講座

【目的】麻酔下ラットの腕神経叢への遠心性電気刺激による正中神経の血流変化についてレーザードップラー法を用いて観察した。【方法】Wistar 系ラット（雄性、12 週齢、 $n = 10$ ）を用い、片側の腕神経叢を鎖骨上部にて露出し、切断後、遠位切断端から遠心性に電気刺激（刺激頻度：10Hz、刺激強度：10V、刺激時間：60sec）を与え、レーザードップラー血流計にて刺激側の前腕部において剖出した正中神経の血流を測定した。

【結果】実測値に関しては、10 肢中 8 肢において、電気刺激中に正中神経血流の増加反応を認め、10 肢中 9 肢においては、刺激中を含む刺激開始から 10 分経過時まで増加反応を示した。初期値と各時点の変化率との比較では、電気刺激終了 2～7 分経過時において有意な増加を認めた（ $p < 0.05$ ）。【考察】刺激による反応には個体差があるものの、何れも増加反応を示したことから、腕神経叢へのアプローチは上肢症状に対して安定した効果を示す有益な鍼治療方法となる可能性が考えられた。その効果発現機序の 1 つとして、腕神経叢への刺激がその分枝である正中神経幹の束内・束外血管に対して作用し、組織循環動態に影響することにより、症状の改善に寄与するものと考えた。